

# リベラル・アーツとメカニカル・アーツ

## Liberal Arts and Mechanical Arts

藤本 温

名古屋工業大学大学院工学研究科  
ながれ領域

Tsumoru FUJIMOTO  
Nagoya Institute of Technology  
Nagare College

### 【Key words】

1. リベラル・アーツ(Liberal Arts)
2. メカニカル・アーツ(Mechanical Arts)
3. サン・ヴィクトールのフーゴー(Hugo de Sancto Victore)
4. 倫理学(Ethics)

### 【概要】

技術的な事柄と非技術的な事柄との関わり，それらの学びの順序と前提について，西洋十二世紀のサン・ヴィクトールのフーゴーの『ディダスカリコン』におけるリベラル・アーツとメカニカル・アーツに関する議論の分析を通して考察する．

### はじめに

リベラル・アーツとメカニカル・アーツについて歴史を遡って考えてみたい．それらの歴史の考究は，技術的な事柄と非技術的な事柄との関わり方や方法的類似性の有無について，また学びの順序や前提について考察すること

でもある。現代の「工学倫理」や「技術倫理」においても、その名称からしてすでに「工学」と「倫理」との関わりが問われていると考えられる。

技術とのアナロジーで非技術的なこと—たとえば倫理—を考察するということは昔から行われていた。古代ギリシアのプラトンの初期対話篇では、徳について吟味するときに、技術（テクネー）とのアナロジーが用いられており—クラフト・アナロジーと呼ばれる—、しかし、その対話がことごとく行き詰まってしまうことから、クラフト・アナロジーをプラトンは結局、放棄したのか否かについては議論がある。その論争は「倫理的な知識のあり方と技術的な知識との間に本質的な相違を認めるか否か、認めるとすればその相違をいかに考えるのか」という重要な問題<sup>1</sup>を含むものである。現代においても、工学倫理ないし技術倫理では、「設計とのアナロジー」で倫理の問題を検討する提案がC. ウィットベックによって行われ、設計問題の解決法は倫理問題への対処にも有効であると主張されており<sup>2</sup>、ここでも賛否がある。本稿は、こうした二種の知の間に本質的な差異を認めるか否か、一方の方法が他方に適用可能であるかという問いを直接に共有するわけではないが、それらにいくらか関わる歴史上の論点と学びの順序について、リベラル・アーツとメカニカル・アーツという二つのアーツの対比を軸に考察する。

リベラル・アーツの「リベラル」は古代ギリシア以来の伝統では「自由」人にふさわしいという意味で理解される。別の解釈もあり、「リベラル」という語は「(樹皮としての) 書物」を意味する“liber”というラテン語に由来するという説明もあったが、この見方はあまり流布していないようである。

リベラル・アーツに対して「自由ではない(illiberal)」とか「卑俗な(vulgar, banausic)」ものとして、歴史的には低い位置づけに甘んじてきたメカニカル・アーツが、他の学知と並ぶ位置にまで一度上昇したのは、十二世紀のキリスト教の神学者サン・ヴィクトールのフーゴー(1096-1141)の『ディダスカリコン』という書においてである。次にまず、フーゴーの時代までの「ア

<sup>1</sup> 瀬口(2002)第4章「徳と技術—プラトン『国家』第一巻におけるクラフト・アナロジー」264頁。

<sup>2</sup> ウィットベック(2000)第1章「設計としての倫理」。

ーツ」(ラテン語では“ars”)の学びに関する基本事項を確認することから始める<sup>3</sup>。

## 1. リベラル・アーツからメカニカル・アーツの登場へ

リベラル・アーツ(liberal arts)はラテン語のアルテース・リーベラーレス(artes liberales)に由来し、その中身は、文法学、修辞学、弁証論の「三学」と、算術、幾何学、音楽、天文学の「四科」からなり、それらを合わせて「自由七科」と呼ばれる。これらの科目は、古代ギリシアの時代まで視野に入れるならば、数学を重んじたプラトンと、言論上のスキルを大切にしたイソクラテスの思想にまで遡ることもできる。

リベラル・アーツは「七つ」であると最初から定まっていたわけではない。キケロと同時代人であるウァロ(116-27 BC)は「医学」と「建築」を加えた「九つ」のリベラル・アーツを提示していた。その後、五世紀前半のマルティアヌス・カベラ(c. 365-c.440)は『フィロロギアとメルクリウスの結婚』という寓話の書の中で、「医学」と「建築」をそこから排除した。この話は、学識ある女性(人間)フィロロギアが、雄弁の神であるメルクリウスへ嫁ぐ話の中で述べられる。婚姻の際、乙女である七つのリベラル・アーツ—算術、天文学、弁証論、幾何学、文法、音楽、修辞学—が、メルクリウスからフィロロギアへ贈られた。その場には、医術と建築といった乙女たちも待機していたが、それらは世俗的なことを気にしているため、リベラル・アーツのグループに入るには値しないとみなされる。こうして「九つ」ではなく「七つ」のリベラル・アーツが提示されて、ローマの政治家カッシオドルス(c. 487-c.580)の頃には定まってくる。

ここまでの時期では、まだ「メカニカル・アーツ」に相当する語(ラテン語)はあらわれない。“artes mechanicae”(メカニカル・アーツ)というタームの最初の使用は、カロリング期の神学者エリウゲナ(c.800-877)によって九世紀に書かれた注釈書、すなわち、上記の『フィロロギアとメルクリウ

<sup>3</sup> 本稿では日本語の「自由学芸」「機械技術」ではなく、またラテン語の“artes liberales”“artes mechanicae”でもなく、「リベラル・アーツ」「メカニカル・アーツ」という英語のカタカナ表記を使用する。

スの結婚』への注解においてである。メルクリウスが花嫁であるフィロロギアに七つのリベラル・アーツを与えた後で、彼女は彼に七つのメカニカル・アーツを贈ることによって応えたとされる。エリウゲナによると、リベラル・アーツは神に由来し、「魂において自然本性的に理解される」が、メカニカル・アーツは「ある種の模倣や、建築などの、人間の創意工夫によって作られる」(pp.96-97)<sup>4</sup>。ここでは建築以外の他の六つのメカニカル・アーツにどのようなものがあるのかは示されていない。

## 2. メカニカル・アーツの序列の上昇

メカニカル・アーツの序列が上昇したのは、十二世紀のサン・ヴィクトールのフーゴーによって書かれた『ディダスカリコン』においてである<sup>5</sup>。『ディダスカリコン』というギリシア語の書名は訳せば『学習論』となるだろう。この書は、当時、設立されたばかりのサン・ヴィクトール修道院のオープンスクールに大勢訪れた年齢の異なるさまざまな学生たちにオリエンテーションを提供するものであったと言われている<sup>6</sup>。

フーゴーによると、学知 (scientia) — ないし哲学 — には次の「四つ」がある。すなわち、(i) 真理の観想をめざす思弁学、(ii) 道徳の規範を考察する実践学、(iii) この世の諸活動を扱う「メカニカル」の学、(iv) 正しく語り鋭く議論する学知を扱う論理学という四つである (DC, 1.11)。知恵の探求、すなわち、哲学の四区分のひとつとして「メカニカル」な学知が正式に入っていることが注目される。フーゴーはメカニカル・アーツの地位を上昇させたのであり、それは従来の学問分類の伝統を「打ち破る」<sup>7</sup>のものであるとも言われる。あらゆる生き物は自らを守るために何らかの防御手段を生まれながら持っている

<sup>4</sup> エリウゲナのテキストは、Lutz(1939)を使用した。

<sup>5</sup> 『ディダスカリコン』の邦訳は、上智大学中世思想研究所編訳(2020)に五百旗、荒井訳がある。引用などで使用させていただいた箇所には「邦訳」と表記して頁数を示したが、それ以外は藤本の訳文である。『ディダスカリコン』は DC と表記し、巻数と章数を付している。テキストは、Buttimer(1939)を使用した。

<sup>6</sup> Taylor(1961)p.3.その他、『ディダスカリコン』のキリスト教的背景等についても Taylor のイントロダクションが参考になる。

<sup>7</sup> Whitney(1990)p.84.

が、人間だけは武装なしに裸で生まれた。そうした「欠乏」のゆえにメカニカル・アーツは生まれた。自分のことを配慮することを知らない生き物には防衛手段が与えられたが、人間は自らの「理性」を用いて防衛手段を獲得できるのである (DC, 1.9)。

フーゴーが指定するリベラル・アーツの中身は先の「自由七科」と同様であるが、次の七つがメカニカル・アーツとして具体的に指示される。すなわち、機織学、兵器学 (武具製造)、商学、農学、狩猟学 (食料調達)、医学、演劇学である。カペラによってリベラル・アーツから排除されていた医学と建築に着目すると、「医学」はメカニカル・アーツに正式に参入が認められ、「建築」はといえどどこにも入っていないように見えるが、実は、兵器学を建築術と鍛冶に分けるという仕方含まれている (DC, 2.22)。

フーゴーは、エリウゲナの注解の内容を展開して、メカニカル・アーツは、「メルクリウスがフィロロギアから持参金として受け取った七人の侍女である」 (DC, 2.20) とした上で、さらに、「リベラル」と「メカニカル」という二種類のアーツの間には、次に述べるような、「類似性」があると言う。

最初の三つのメカニカル・アーツ (機織学、兵器学、商学) は、「外的」な保護を人間に与えるもので、これは「三学」 (文法、弁証論、修辞学) の主題である「言語」も、その学に従事する者の身体を越えて「外的」に作用することに似ている。他の四つのメカニカル・アーツ (農学、狩猟学、医学、演劇学) は身体に「内的」な滋養を提供するものであり、ちょうど「四科」 (幾何学、算術、天文学、音楽理論) が「内的に形成される知性概念に関して注意深く研究する」 (DC, 2.20, 邦訳 314 頁) ことに似ている。こうして、リベラル・アーツとメカニカル・アーツには、三つ組の方は「外的」、四つ組の方は「内的」という仕方での類似性があるとされる。

現代のわたしたちにとっては、この「類似性」の指摘にはやや強引な感があるかもしれない。しかしまずは『ディダスカリコン』における今の類似性の導入のコンテクストを確認しておこう。

七つのメカニカル・アーツは、メルクリウスがフィロロギアから持参金として受け取ったものであるとフーゴーが言うとき、その理由として「なぜなら、知恵が結合した雄弁 (eloquentia) にあらゆる人間の働きが確かに服しているからである」 (DC, 2.20) と述べている。ここで「知恵」はフィロロギアに、「雄

弁」はメルクリウスに対応していると考えられる。そして、「あらゆる人間的働き」はそれら二つものの「結合」に「服している」とされる。つまり、リベラル・アーツとメカニカル・アーツは、雄弁（メルクリウス）と知恵（フィロロギア）の「結合」に際して伴うアーツとして、言い替えると、その結合に両輪として奉仕するアーツとして導入されているのである。

あらゆる人間的働きは知恵が結合した雄弁に服することについて、フーゴーは、今の言葉の直前でキケロの『発想論(De inventione)』という修辞学の書の言葉を引用しており、その主旨は、一切の指導者である知恵が身近にあるならば、国家にとって大きな利益になり、友人たちも最も安全になるというものである。つまり、「知恵と結合した雄弁」が国家にとっても友人にとっても幸いの源であり、フーゴーはここで、その結合に伴うものとして二つのアーツを導入している。そして単に導入するだけではなくそれらの「類似性」をも指摘していることから、二つのアーツを区別して放置するのではなく、それらの間の何らかの関係性にも関心を寄せていることがわかる。

### 3. 共通性と類似性の問題

ここでエリウゲナに一度戻って、「メカニカル」の含意を確認しておこう。「メカニカル」(mechanical)という英語は、そしてそのラテン語(mechanicus)も、ギリシア語の形容詞「メカニコス」に由来し、名詞では「メカネー」で、いずれも「工夫」「考案」という含意をもつ。「メカニカル」に対応するラテン語はエリウゲナにとっては、人間が行う「工夫」「考案」のことであって、現代人が日常的にイメージする物体的な「機械」と同じではない。現代のわたしたちも「彼の仕事は機械的だ」と言うときのように、人間の行為について「機械的」という日本語を使用することはあるが、その意味するところは、機械の有する正確さや早さといった性質を踏まえて、彼の仕事は、機械のように早くて正確だという意味かもしれないし、機械のように感情の入らない冷たい仕事をするという意味であるかもしれない。しかし、エリウゲナが言っている「メカニカル」は、先に述べたように（本稿30頁）「ある種の模倣や人間の創意工夫」から生じるということであり、誰か人間が「機械的」に

行為すると現代人が言うときのような含意とは異なる（後述するように、「メカニカル」には他にも注意を要する重要な用法がある）。

ここで「創意工夫」と訳したラテン語“excogitatio”には、キケロの伝統の継承があることが指摘されている<sup>8</sup>。キケロは先述の『発想論』（1.9）において、「発想(inventio)」とは「真なる、ないし真実と思われる事柄の創意工夫」であり、修辞学(rhetorica)の構成要素のひとつである「発想」とは「創意工夫」のことだとしている<sup>9</sup>。メカニカル・アーツを説明するときに、この同じ「創意工夫」という語をエリウゲナが選択していることから、「修辞学」や「雄弁(eloquentia)」の特徴のひとつとされていた「創意工夫」や「発想」は、メカニカル・アーツと修辞学との接点になり得るものであることがわかる。これを以下では、両者の間の「共通性」と呼ぶことにする。

フーゴーも、メカニカル・アーツと修辞学との間の「創意工夫」という点での「共通性」の基本を受け継いでいると考えられる。メカニカル・アーツのひとつである「狩猟学」は、大昔の狩猟生活から取られた名称であり、実質は、あらゆる食品や調味料の供給に関わるものであることをフーゴーはまず断った上で、食品としてパンや肉の種類を列挙した後に、前業に関して料理長が「考え出す＝創意工夫する」(excogitare)ものとしてサラミソーセージ、ブータンソーセージ、挽肉料理、小型肉パイ他を挙げる（DC2.25, 邦訳319頁）。ここでは創意工夫という点で修辞学と狩猟学の間に「共通性」が認められる。しかし、七つのアーツを「三つ」組と「四つ」組に分ける「類似性」の議論では、修辞学は「三つ」組に、「狩猟学」は「四つ」組に属するから、ここでは類似性は成り立たない。「共通性」と「類似性」の議論は区別されなければならない。

メカニカル・アーツの中で「商学」はストレートに修辞学に結びつく。

商学はまことに、いわばある独特の修辞学である。なぜなら、この職業には雄弁がとくに必要だからである。そこから、雄弁の能力に秀でていると言われる者は、メルクリウス(Mercurius)、すなわち商人(mercator)の主(kirius)と呼ばれるのである（DC2.23）。

<sup>8</sup> Burgon(2018)pp.34-35.

<sup>9</sup> キケロ『発想論』（1.6）では、修辞学とは「精巧な雄弁」のことだと言われている。なお、「修辞学」と訳した“rhetorica”は「弁論術」とも訳される。

商学がメカニカル・アーツに数えられる背景には、十二世紀に入って、農業中心の社会から都市・商業中心の社会へ移行して商人の地位が向上したことが反映されている可能性が指摘されている<sup>10</sup>。この引用は「共通性」の議論としても、また商学も修辞学もどちらも「三つ」組に属するから「類似性」の議論としても読むことができるだろう。

バーゴン(2018)は、フーゴーによる「類似性」の議論は、メカニカル・アーツの考察に「正当性」を与えるために必要であるとする見解(Ovitt)に対して、その必要はなく、むしろそれは、エリウゲナが設定した二つのアーツの間の関係性を意味づけようとしているとして、以下の解釈を提示している<sup>11</sup>。バーゴンは、メカニカル・アーツが覆いや栄養を考案する方法と、リベラル・アーツが心や魂の中で言葉や概念を考案する方法に着目して、メカニカル・アーツで行われるような発想は、リベラル・アーツでの発想のパターンを明確にするのを助け、前者は後者の例示的なもの・範型であるとさえ言えると主張する。そして『ディダスカリコン』のなかに「リベラルなものと同様にメカニカルなものとの暗黙の相互作用」をみる<sup>12</sup>。リベラル・アーツ、とりわけ言語に関わる三学(文法学、弁証論、修辞学)は、「メカニカルな心理学」を必要としており<sup>13</sup>、メカニカル・アーツはときとして、三学ないし論理学の範例となっている<sup>14</sup>。そして工夫をともなう制作、すなわちポイエーシスには、古代以来、織ったり作ったりするような、ものを「作る」行為に加えて、言語的な制作が含まれていたことをから、フーゴーにおいてもその可能性を探究して、メカニカルなものの範型的でポエティックな可能性は、フーゴーの『ディダスカリコン』に暗黙のうちに実現されているという<sup>15</sup>。

この興味深い解釈をここで詳しく検討することはできないが、バーゴンの主張は、(リベラル・アーツの一部である)三学とメカニカル・アーツ全般の相互関係の議論が主になっているという点で、わたしたちが(修辞学との)共通性の議論と呼んだものとは同じでない。そしてフーゴーによる「類似性」の議論は、三学とメカニカル・アーツ全体との相互関係の話ではなく、「三つ」

<sup>10</sup> Whitney(1990)p.84.

<sup>11</sup> Burgon(2018) p.37sq.

<sup>12</sup> Burgon(2018)p.8.

<sup>13</sup> Burgon(2018)p.9.

<sup>14</sup> Burgon(2018)p.23.

<sup>15</sup> Burgon(2018)p.52.

組と「四つ」組との間でのことであるから、バーゴンの議論は「類似性」の議論にそのままでは妥当することはないように思われる。

では類似性の議論にはどのような目的があるのだろうか。「三」と「四」をそれぞれ「外的」と「内的」にわけてその類似性を想定するというフーゴの説明は、あくまで仮説ないし提案として理解しておくのがよいのではないか。リベラル・アーツについてはフーゴの時代までにさまざまな議論があったが、フーゴが列挙しているメカニカル・アーツのうち、医学、兵器学（建築を含む）、農業のように、大小の違いはあれ理論としてある程度発達していたものがあるとしても、機織学、狩猟学、商学ははまだ技術ないし理論として未成熟であったことからすると<sup>16</sup>、七つのリベラル・アーツに対して、類似性の観点から「三」と「四」に分けて対応を考えてメカニカル・アーツの中身を仮説として特定し、そのいくつかについては、アーツないし学としての仕上げを今後の探求に委ねているという可能性を考えてもよいと思われる。つまり、これから発展・発達が必要な、あるいは期待される技術をも含めて、「七つ」のリベラル・アーツに合わせて、「七つ」のメカニカル・アーツが列挙されているのではないか。これはメカニカル・アーツに「正当性」を与える（Ovitt）という、何か下位にあるものが上位のものを利用して正当性を得るという従属的な位置づけというよりは、発展を期待しているという点では積極的な理解を含むことになる。

背景には「数」に対するフーゴのこだわりもあったと考えられる。「七」という数字は、ユダヤ教やキリスト教において象徴として用いられることが多いものである。フーゴには数的象徴主義の傾向があるとして、『ディダスカリコン』における最初の六巻は、神による創造の六日間とパラレルになっており、第七巻として扱われることの多い『（見えざる光の）三日間について』は、七日目の「観想」という新たなモードを扱うとする研究もあり、ここでは「七」がキーワードになる<sup>17</sup>。他にも、「建築」は『ディダスカリコン』第六巻・第四章では「聖書に似ている」重要なものとして扱われているにもかかわらず、第二巻では「七つ」のメカニカル・アーツに明示的に入れられていなかったのは（本稿31頁）、建築をメカニカル・アーツに入れると「七つ」ではなく

<sup>16</sup> Sternagel(1966)p.69.

<sup>17</sup> Parcell(2012)p.90 で紹介されている。

「八つ」になってしまうという事情も想定可能であろう。また、フーゴーにとっての「四」の重要性も、『ディダスカリコン』第二巻・第四～第六章の記述から明らかである<sup>18</sup>。

#### 4. フーゴーの「メカニカル」

フーゴーが生きた十二世紀は、プラトンの『ティマイオス』がラテン語訳で読まれた時代であり、その書ではデーミウールゴスという造り主（神）による世界制作が語られている。アリストテレスの書が翻訳されてその思想が西洋世界に本格的に導入される以前の十二世紀の学者たちは、『ティマイオス』の影響下で、現代のわたしたちとは根本的に異なる技術あるいは世界に関する見方・考え方を持っていたことが指摘されることがある。

この問題を考えるとき、ピエール・アド（1922-2010）の『イシスのヴェール』<sup>19</sup>が参考になる。アドは技術に対する「プロメテウスの」態度と「オルフェウスの」態度を区別し、現代の科学技術はプロメテウスのな技術の末裔であり、それはギリシアの機械術に始まって、十七世紀の機械革命へと展開したものであると言う。それに対して、オルフェウスの態度とは「知覚の世界に限定して、道具の助けは用いず、哲学や詩の言葉、あるいは絵画の手段を用いて、自然の秘密を発見しようと努める」（181頁）態度である。オルフェウスもギリシア神話に登場するが、そのスキルは音楽—豎琴の能手—と詩である。この自然観が見出される典型はプラトンの『ティマイオス』における世界創造の物語であり、それは「ポイエーシス、つまり言説として、また詩作品として表され・・・宇宙の詩人である神の芸術の遊戯を模倣する、芸術のゲーム」（183頁）である。技術に対するこうした二つの態度はときとして出会って互いを完成させることもあるとされる。

プロメテウスのな「メカニカル」は「トリック（策略）」とか、自然に対する「暴力」を含意する「メカニカル」であり、先に「工夫」を意味することを確

<sup>18</sup> それぞれの章の邦訳のタイトルのみ挙げると、第四章「魂の四から成るものについて」、第五章「身体の四から成るものについて」につづき、第六章「四科(quadrivium)について」が論じられる。

<sup>19</sup> 以下、頁数は邦訳による。Burgon(2018)も同書から影響を受けている。

認したギリシア語の「メーカネー」が「策略」をも意味することに由来する(122頁)。それは紀元前二世紀の擬アリストテレスの著作『機械学』の序文に登場するもので、「自然に反する」ことがあり、人類を益する結果の創造に関わる「メカニクス」である。今日の英語の“machinate”にも「たくらむ」という意味があり、「メカニクス」(mechanics)という語の元にあるギリシア語の動詞「メーカナースタイ」にも、またラテン語「マーキナーリー (machinari)」にも、「仕掛ける」「たくらむ」という意味がある。この系統の「メカニクス」の考え方は、アドによるとペイコン、デカルト、ガリレオにおいてその最上級の表現を受けた。それに対して、アドは『ティマイオス』で語られる世界創造の物語をオルフェウスの態度の原型として高く評価するのである<sup>20</sup>。日本においても、藤澤令夫が、近現代の科学技術における「実験」という行いを、自然に対する「たくらみ」「仕掛け」「取り調べ」「尋問」、さらには「拷問」といった語によって特徴づけて<sup>21</sup>、それとは異なる、物体論的機械論ではない自然観・世界観を『ティマイオス』等の分析に基づいて明晰な議論を展開していたことがここで想起されるべきであろう<sup>22</sup>。

フーゴは『ティマイオス』を読んでいたが、『機械学』をも存知していたかどうかはわからない。フーゴ自身は、「メカニカル」について次のように言っている。

それらの学知がメカニカル (mechanicae), すなわち, “adulterinae” と呼ばれるのは, それらは, 自然からその形式を借りる技術者の仕事に関わるからである (DC, 2.20, 下線は藤本)。

“adulterinae”とは辞書的意味としては「姦淫者の」「不純な」「偽造の」ということであり、なぜそれが「メカニカル」の言い替えになるのか。この箇所

<sup>20</sup> 日本語による新旧の『アリストテレス全集』の『機械学』では、当該箇所の「メーカネー」の訳は「創意工夫」(和泉訳, 新版248頁)、「メーカネー」[機械] (副島訳, 旧版159頁)、英訳では“Mechanical”(Foster, p.1299, ed.Barns)である。同箇所を引用しているアドの『イシスのヴェール』の原書では“la ruse”(Hadot, p.144)、その英訳は“trickery”(Chase, p.102)という「策略」を意味する語であり、プロメテウスの傾向を示す訳語が採用されている。この箇所の「メーカネー」の訳語の選択は研究者の間で一定していないようである。

<sup>21</sup> 藤澤(1989)p.24.

<sup>22</sup> 藤澤(2014)「V コスモロジーへの集成」を参照。

にはさまざまな解釈があり、邦訳では上記引用の下線部は「自然模造的」と訳されている(邦訳315頁)。この訳語は、技術者は「自然からその形式を借りる」というフーゴーによる今の説明から、つまり、自然を「模して」「造る」ということから選択された語であろう。フーゴーは「合鍵」の例を用いてこれを説明しており、合鍵とは本来の鍵を「模して」「造られ」るものである(DC, 1.9)。この「自然模造的」という訳語においては、“*adulterinae*”という語が本来もつネガティブなニュアンスは緩和されている<sup>23</sup>。

“*adulterinae*”という語の由来として、「メカニコス」と「モイコス」という二つのギリシア語の音声が類似していることから生じたという推測もなされている。「モイコス」は、「姦淫者」「愛人」を意味する。フーゴー以前に“*adulterinae*”とメカニカル・アーツの関係に言及したランのマーティン・エリウゲナの弟子—は、メカニカル・アーツは、他人の結婚生活を「秘かに汚す者」のようだと解した。すなわち、メカニカル・アーツにより作られたものは、非常に繊細であることから、どのように作られて維持されているのかが外側からは分からず「見えない(*invisibilis*)」(つまり、秘められている、隠されている)ことがあり、そのとき、それを見抜けない人の視力(*visus*)をある仕方ですんで「盗んでいる」のだと説明した<sup>24</sup>。

他にも、“*adulterinae*”という語から、メカニカル・アーツはリベラル・アーツの自由な精神を「汚す」働きをもつと解する研究者もいるが<sup>25</sup>、フーゴーは全体としてはメカニカル・アーツに対して好意的であると思われ、メカニカル・アーツのそれぞれについて章を設けて紹介して、いくつかの分野での権威となる書—建築ではウィトルウィウスの『建築書』、農業ではカトーの『農業論』やウェルギリウスの『農耕詩』など—に言及している。すなわち、それらの学習を勧めているのである。こうして、フーゴーの「メカニカル」には、「策略」とは異なる、そしておそらく「汚す」というネガティブな含意があったとしても希薄なものとして、そしてエリウゲナ的な「創意工夫」として理解され得る場があると考えられる。フーゴーにおいてメカニカル・アーツの基本

<sup>23</sup> Taylor(1961)の英訳は“*adulterate*”, Offergeld(1997)の独訳は“*die unechten*”と訳している。

<sup>24</sup> Laistner(1922-1923)p.439による。Taylor(1961) p. 191, n. 64でも紹介されている。

<sup>25</sup> Whitney(1990)p.85, n.44で諸解釈が紹介されている。

は自然を「模倣」し、自然から「形式を借りる」ものであって、「自然に反する」ということが明記されることはない。

## 5. 学習の順序

フーゴーは「哲学を人間のあらゆる行為に広げなければならない」(DC, 14, 邦訳 279 頁)としたうえで、哲学を四部門に分ける。すなわち、すでに述べたように、(i) 思弁学、(ii) 実践学、(iii) 「メカニカル」の学、(iv) 論理学という四つである。論理学以外の部門は「治療薬」との関係で説明されており、理論的アーツが無知に対する治療薬、実践的アーツが悪徳に対する治療薬、そしてメカニカル・アーツは人間の自然的弱さに対する治療薬である(DC, 6.14)。

哲学の四つの部門は、そのうちのどれかひとつないしふたつを学ばよということではなく、それらを全体として学ぶ必要があり、しかも学びの順番がある。まず(iv) 論理学を、次に(ii) 実践学、そして(i) 思弁学、最後に(iii) メカニカルの学という順である。メカニカルの学は「先行する学知の理(ことわり)によって支えられていないなら、それ自体ではまったく無効なものである」(DC, 6.14)とされる。しかしこれは、知恵を探求する者がみな最後は技術の熟練者になるべきだということではないであろう<sup>26</sup>。では最後に学ばれるべきメカニカルの学とはどのようなものなのか。

「哲学とはすべての人間的・神的事物の根拠を徹底的に探求する学問分野である」。また先に述べられたことを、すなわち哲学は知恵への愛であり研究であるが、建築術や農業やそれに類するもののように道具によって展開される知恵ではなく、「諸事物の唯一の第一の根拠である知恵」への愛と研究であるという点は変えるべきではない。つまり同一の働きであっても根拠づけの面では哲学に属し、管理・運営面では哲学から除外することが可能なのである。たとえば今目の前にある例について言うなら、農業の根拠づけの働きは哲学者に属

<sup>26</sup> フーゴーは、諸学芸の頂点を極めた後に陶工の仕事に転向した哲学者や、靴直しの熟練に至った哲学者に言及することはある(DC3.14, 邦訳 353-4 頁)。

しているが、農業の管理・運営は農夫に属しているのである(DC, 14, 邦訳 278-9 頁).

根拠づけ・理論(ratio)と管理・運営(administratio)の区別が重要である。農作業に習熟して実践者になるのではなくても、知恵を愛する者はメカニカル・アーツを理論として学ぶべきであり、実際の管理・運営は農夫に属する。メカニカル・アーツとしての農業は、農業の「管理運営」ではなく、農業の「理論」を探求するものである。ここで言うメカニカルなものは「学知」「理論」としてのそれであり、経験や熟練によるものではない。農業を例にして説明されていることは、建築その他のすべてのメカニカルな分野に当てはまるという含意であろう。すでに述べたように、七つのメカニカルな学問のすべてが、フーゴの時代に理論化されていたとは思われないことから、その根拠づけ・理論化を知恵の探求(哲学)として行うべきだという構想をフーゴはもっていた、あるいはその必要性を感じていたのかもしれない。

こうして、リベラル・アーツを含む諸学を習得した後にメカニカル・アーツを学ぶということが、フーゴが提案する学習の順序である。リベラル・アーツの中で三学は(iv)論理学の下に、四科は(i)思弁学の中の数学の下に入り、それらの「七つのリベラル・アーツは、他のすべてのものに先立って手元にあるべき」(DC,34)であり、そのうちの一つでも欠けてはならないとされる。

フーゴの学習論における倫理(実践学)の位置はというと、(ii)実践学を学ぶのは、論理学の後、思弁学の前であるから、三学の後、四科の前ということになる。つまり、リベラル・アーツを学び習得する過程で倫理を学ぶことになる<sup>27</sup>。ここで学ぶのは、理論としての実践学であり、プラトンやキケロの『国家』がその分野の権威ある書として言及されている。実践学には、倫理学、家政経済学、政治学があり、それぞれ個人の領域の実践学、家庭での実践学、公共的な実践学とも呼ばれている(DC, 2.19)。

<sup>27</sup> 前段で述べた、他のすべてのものに先だってリベラル・アーツを学ぶということは、順序として(ii)実践学の後になる四科については文字通りには整合していないようにみえる。「他のすべてのものに先だって」ということは、リベラル・アーツの重要性を強調するものとして理解しておくのがよいであろう。

リベラル・アーツの基本を倫理に見る立場、あるいは倫理を含めて考える立場からは、上記の学習の順序には異論があるかも知れない。そこで最後に、フーゴの学習論には倫理に直接に関連するものとして次に述べる「学修」(disciplina)が重要なものとして前提されていることを確認しておこう。

### おわりに一学修

『ディダスカリコン』においてフーゴは、学習ないし研究に必要なこととして三つのことを取りあげる。そのひとつである「学修」(disciplina)は、「称賛に値する仕方生きながら、日々の行いを学知と結合すること」(DC, 3.6, 邦訳 340 頁)である<sup>28</sup>。学ぶということは学知の理(ことわり)を認識することであり、それは同時に、学ぶ者自らの生き方、生のあり方の理の認識となるのでなければならない。「恥知らずな生活がけがしている学知は褒められたものではない」(DC, 3.12, 邦訳 347 頁)ゆえに、「学修」がおろそかにならないように「最大限の注意」(*ibid*)が求められるという非常に厳格な学習態度が学ぶ者に要請されている。

こうした考え方を指し示す言葉としてフーゴは「日々の行いは学知を飾る(Mores ornant scientiam)」(DC, 3.12, 邦訳 347 頁)をとりあげる。この言葉の由来ひとつと考えられるセネカの『倫理書簡集』(88)では<sup>29</sup>、美德(virtus=virtue)に結びつかないようリベラル・アーツが問題視されている。真のリベラル・アーツは美德を教えるものであり、美德という目標をもたない学芸にはあまり意味が認められず、文法、幾何学、音楽等といったリベラル・アーツは、魂に美德を受け入れる下準備をするにすぎない。真のリベラル・アーツは単なる学問的知識ではなく美德に根ざしていなければならないのである。

<sup>28</sup> 他に、素質(natura)と修練(exercitium)も必要だとフーゴは言う。なお、「学修」と訳した“disciplina”には「教養」という含意もあり、古典ラテン語では「パイディア」というギリシア語の訳語として用いられていたが、その後他のニュアンスも加わっていた。イリイチ(1995)146-7 頁注(20)を参照。

<sup>29</sup> セネカ(2006)76-96 頁。Taylor(1961)p.215, n.62 は、セネカの他に、クインティリアヌスの書を今の言葉の由来として指示している。

『ディダスカリコン』におけるフーゴの「学修」の考え方にもこうした傾向がエコーしている。そこでは、学びつつ学知を汚さない学習態度、「日々の行い」が要求され、そうした姿勢でしかるべき順に学びを進めなければならない。学知は先人が到達した叡智であるという含意もあり得るが、エリウゲナ的にはリベラル・アーツは神に由来するものであり、学ぶ者の生活態度がそれを汚すことがあってはならない。この「学修」の説明は明確に「倫理」として語られているわけではないようにみえるかもしれないが、そうではなく、「日々の行い」と訳されたラテン語の“mores”（単数形は“mos”）は、今日の英語の“moral”のもとになる語であり「道徳」とか「倫理」と訳すこともできる。そして「わたしたちの日々の行い（道徳）の学修」は「実定的正義」に関わる事柄であり、実定的正義は「自然的正義」から生まれると言われるとき（DC, 6.5）、前提となる理論があることがわかる。この二つの「正義」概念の詳述は本稿の主題を超えるものであるが<sup>30</sup>、本稿においてリベラル・アーツの検討から始めてフーゴによる学習の順序について吟味した結果、「正義」に関するさらなる論究の必要性に到達したということから予想されるのは、フーゴは、リベラル・アーツやメカニカル・アーツ、そしてその他の学知を学ぶ前提となる哲学的・倫理的・宗教的な思想基盤を確固としてもっており、必要があればそれを説明し論じる準備もあるということである。

[文献]

- ・ Barns, J. ed.(1995): *Complete Works of Aristotle*, Volume 2: The Revised Oxford Translation, Bollingen Foundation.
- ・ Burgon, A. E. J. (2018): *The Mechanical Arts and Poiesis in the Philosophy and Literature of the Twelfth-Century Schools* (Doctoral thesis, University of Cambridge). <https://doi.org/10.17863/CAM.41534>
- ・ Buttmer, C. H. ed. (1939): *Hugonis de Sancto Victore Didascalicon de Studio Legendi*, Studies in Medieval and Renaissance Latin 10, The Catholic University Press.
- ・ Hadot, P. (2008): *Le voile d'Isis - Essai sur l'histoire de l'idée de Nature*, Editions Gallimard.

<sup>30</sup> この二つの「正義」は四世紀のカルキディオスの『ティマイオス註解』でも、十二世紀のコンシュのギヨームによる『ティマイオス註解』でも言及されている。なお、「わたしたちの日々の行い（道徳）の学修」を理論的に考察するのは、本稿30頁で述べた「(ii)道徳の規範を考察する実践学」であろう。「日々の行い（道徳）の学修」も「道徳の規範」も原語は同じ“morum disciplina”である。

- ・ Hadot, P.(2008): *The veil of Isis : an essay on the history of the idea of nature*, translated by Michael Chase, Cambridge : Belknap Press of Harvard University Press.
- ・ Laistner, M.L.W.(1922-23): ‘Notes on Greek from the Lectures of a Ninth Century Monastery Teacher’ , *Bulletin of the John Rylands Library* 7, pp. 421–456.
- ・ Lutz, C.E.(1939): *IOHANNIS SCOTTI ANNOTATIONES IN MARCIANUM*, The Medieval Academy of America, No. 34.
- ・ Offergeld, T.(1997): *Didascalicon de studio legendi = Studienbuch*, Hugo von Sankt Viktor, Fontes Christiani, Bd. 27, Herder.
- ・ Ovitt, G.Jr.(1983): The Status of the Mechanical Arts in Medieval Classifications of Learning, *Viator*, vol.14, pp. 89-106.
- ・ Ovitt, G.Jr.(1987): *The restoration of perfection : labor and technology in medieval culture*, Rutgers University Press.
- ・ Parcell, S.(2012): *Four Historical Definitions of Architecture*, McGill Queens University Press.
- ・ Sternagel, P.(1966): *Die artes mechanicae im Mittelalter, Begriffs- und Bedeutungsgeschichte bis zum Ende des 13. Jahrhunderts*, Laßleben.
- ・ Taylor, J.(1961): The Didascalicon of Hugh of St. Victor: A Medieval Guide to the Arts, Columbia University Press(Rep.1991).
- ・ Whitney, E.(1990): *Paradise Restored: The Mechanical Arts from Antiquity through the Thirteenth Century*, TRANSACTIONS of the American Philosophical Society, vol. 80, Part 1. Philadelphia: The American Philosophical Society.
- ・ アド, P.(2020) 『イシスのヴェール 自然概念の歴史をめぐるエッセー』(小黒和子訳), 法政大学出版局
- ・ アリストテレス(1988): 『アリストテレス全集 10 小品集』(副島民雄, 福島保夫訳), 岩波書店
- ・ アリストテレス(2015): 『アリストテレス全集 12 小論考集』(内山勝利, 神崎 繁, 中畑正志編), 岩波書店
- ・ イリイチ,I(1995): 『テキストのぶどう畑で』(岡部佳世訳), 法政大学出版局
- ・ ウィットベック, C.(2000): 『技術倫理 1』(札幌野順, 飯野弘之訳), みすず書房
- ・ キケロ(2000): 『キケロー選集 修辞学 I』(片山英男訳), 岩波書店
- ・ セネカ(2006): 『セネカ哲学全集 6 倫理書簡集 II』(大芝芳弘訳), 岩波書店
- ・ プラトン(1975): 『プラトン全集 12 テイマイオス・クリティアス』(種山恭子, 田之頭安彦訳), 岩波書店
- ・ 斎藤治之(1997): 『古高ドイツ語 メルクリウスとフィロロギアの結婚』, 大学書林
- ・ 上智大学中世思想研究所編訳(2020): 『中世思想原典集成精選 4 ラテン中世の興隆 2』, 平凡社ライブラリー
- ・ 瀬口昌久(2002): 『魂と世界—プラトンの反二元論的世界像』, 京都大学学術出版会

- ・藤澤令夫(1989):「いま「自然」とは」『岩波講座転換期における人間2 自然とは』, 岩波書店,pp.1-33.
- ・藤澤令夫(2014):『プラトンの認識論とコスモロジー—人間の世界解釈史を省みて』, 岩波書店

\*本稿は, JSPS 科研費 19K00031 および 2021 年度名古屋工業大学・教育改善推進経費による助成を受けたものである.